

# 海軍外郭団体雑誌『くろがね』

全三巻・別冊

海軍外郭団体雑誌＝内閣情報局の検閲対象外とされ、  
一定の「自由」を持ちえた会員限定雑誌  
戦時下の言論統制を多角的に捉えるためにも注目すべき資料

編・解題—石川 巧 (立教大学文学部教授)  
造 本—A5判 糸上製函／並製 (別冊のみ) 総 860 頁  
価 格—揃価 63,000 円

【第二回配本】2019年5月 ISBN978-4-909680-13-6

【第一巻】256 頁  
『くろがね会報』1巻1号～2巻1号(くろがね会、1941年10月～1942年2月)  
→『くろがね』1巻1号～5号(同、1942年3～7月)

【第二巻】272 頁  
『くろがね』1巻6号～10号(同、1942年8月～1943年1月)

【第一回配本】2018年11月 ISBN978-4-909680-14-3

【第三巻】270 頁  
『くろがね』2巻1号～12号(同、1943年2～12月)

【別冊】62 頁  
ISBN978-4-909680-15-0 (別冊のみ分売可 3,000 円)  
\* 解題・総目次・索引

## 関連図書案内

\* 文庫文庫類従 21\*  
**戦時推薦図書目録**  
監 修—大久保久雄  
編・発行—福島鑄郎  
本全1巻/A5判/糸上製函/総312頁  
格—22,000円

\* 文庫文庫類従 45\*  
**戦時戦後の新聞メディア界**  
—『日本新聞報』附・『満洲新聞協会報』  
監 修—大久保久雄  
編・発行—日本出版配給  
本全1巻/A5判/糸上製函/総312頁  
格—22,000円

\* 文庫文庫類従 21\*  
**戦時末期敗戦直後 新聞人名事典**  
—附・『日本新聞年鑑1946』  
監 修—井川充雄  
本全2巻/A5判/上製函/総750頁  
価—40,000円

\* 現代社会・文化史資料\*  
**『国際女性』—占領期女性雑誌メディア**  
編・解題—石川 巧  
造 本—全1巻/A5判/上製函系/総376頁  
格—22,000円

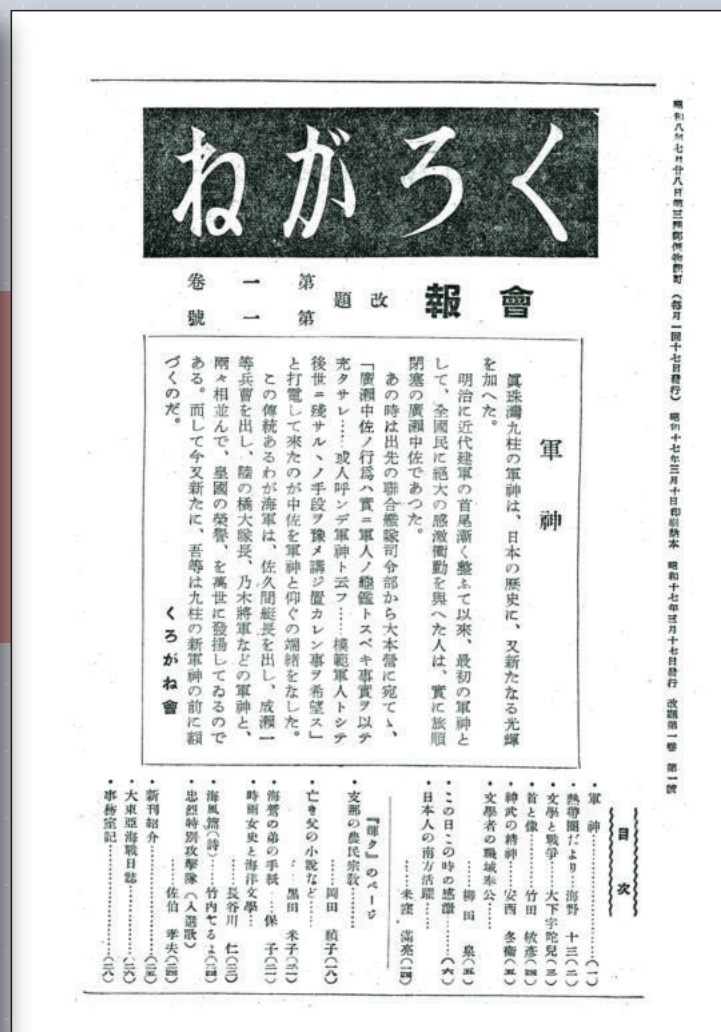


編・解題—石川 巧

# 海軍外郭団体雑誌『くろがね』

[復刻版]  
全三巻・別冊

海軍兵士への慰問品として娯楽読物を必要としていた海軍、  
「自由」に原稿を執筆できる場を切実に求めていた探偵小説作家、  
思惑が一致したところに生れた稀有な言論文藝雑誌。



戦時期言論統制の下、作品発表のメディアを奪われた  
江戸川乱歩ら探偵小説作家たち。  
「筆を折った」/別の小説分野に「転じた」とされてきた作家たちは、  
海軍省の外郭団体会報に作品を発表することで戦時中も執筆を続けていた。

出版メディア史研究において言及されてこなかった雑誌であり、  
収録作品の多くが新たに発見された新資料。  
戦時下の雑誌メディア研究と探偵小説作家研究の両面において本書は重要。

十一月十四日の海軍兵学校卒業式見學旅行に、くろがね會からは笹本實、攝津茂和、秦賢助の三君と私が参加した。ほかに同行者は海軍省詰記者俱樂部「黒潮會」の各社記者諸君、寫眞班員、婦人雜誌代表、日本映畫社のニュース班など約三十名であった。

教育参考館などを巡覽した。これら生徒の日常、校内の機嫌については、昨年くろがね會幹部諸君が見學、夫々發表された通りである。十、三四日の兩日にかけて我々の案内役を引受けて下さった近藤賢一少佐の懇切丁寧な誘導ぶりには一同大いに感謝した。印象的な八字髭、鄭重な言葉遣ひ、説明中口をついて出る諧謔、身振り手振り、チョコンとあみだに冠つた軍帽、しかもこの飄逸の中に時々ヒリッとした軍人魂が蜂鋸を現はす所など流石と肯かれ、作家一同甚だ好印象を受けたのである。

江田島は唯一の旅館も民家も、卒業式参列の爲途々全國から來島した卒業生の親御さん達で一杯なので、我々の宿泊する餘地なく、その日は奥の旅館に引返し、翌十四日朝い

卒業式に列するため、一同モーニング又は儀禮章をつけた國民服に着更えて、再び江田島に渡つた。九時三十分、御差遣宮御召艦入港、十時御上陸、我々一同は、文武官、生徒、父兄など、共に、校内棧橋から大講堂御休憩所までの御道筋に諸列奉迎、十時三十分

文學と戦争

(私の一つの重大なる提唱) 大下宇陀兒

文學する者にとつて、近頃の大きな悩みの一つは、文學の効果、直接に戦争に關する限り、新聞の記事には遙かに及ばないといふことであらうと思ふ。前からそれは感じてゐた事であるが、近頃は特にその感じが深い。私達は文筆挺身の誓ひを立てた。そのため仕事のひとつとして、大東亞戦を書きたいと思ふ。しかしながら、私達の構想を遙かに越えて、皇軍の戦果は偉大である。ある構想にかゝつてゐる間に、戦果は素晴らしい速度で進められて行く。僅かに數行の大本營の發表が、あらゆる文學的表現の技巧を打負かして私達を感激させる。また各新聞社の特派員が身を賭して第一線に出て、生々しい體験を書いて送る。負け惜しみをいふ必要はない。實際この特派員の書く記事の方が、私達の書きたいと思ふ戦争小説よりも、ずっと大きな感動を與へるのである。(ついでにこゝで各新聞社の特派員に對して、銃後國民は何かもつと感謝の意を表する必要があるものであらうか)

よいことには、今は文筆の士が多數現地へ赴いた。さうしてこの人達は、新聞記事に負けないだけの戦記を後方へ送つてくれるであらう。第一報として海軍報道班の北村小松君が、ちかみに見た敵機をオールへ書いた。まだ彈丸雨飛の現地からはなかつたが、さすがに觀察は文學の士らしい鋭い角度からなされてゐると感じさせられるものがある。同じ海軍報道班では、石川達三君が、海野十三君が、近くそれらの戦記を送つてくれるだらう。しよせんこれは、現地へ赴いた我等の友人を待つほかはない。今後も、多勢出かけるだらうし、さうすれば、はじめて私達の待望する戦記が出て来るのである。

しかしながら、一方に於て最近にひどく私を喜ばせたのは、やはり新聞の記事で、山下奉文中將についてのことである。偉勳赫赫たる山下中將の、現地先きにある書架を覗くとこゝに義太夫全集と「戦争と平和」があつたといふのである。シンガポール攻略戦の最中であつて、中將は「戦争と平和」を讀んでゐる。海軍でも、同じやうなことがなかつたとはいへない。戦争の小説が、あの激しい戦ひの中で讀まれてゐるのだ。これは、私達にとつて、實に心強いことであらねばならぬ、行

執筆者名一覧

- 浅原六朗/安西冬衛/生澤朗/井東憲/岩佐東一郎/海野十三/江戸川乱歩/大倉燁子/大坂圭吾/大下宇陀兒/大坪草二郎/菊池寛/北園克衛/北村喜八/国枝史郎/沙和宋一/撰津茂和/高田義一郎/高島華宵/竹内てるよ/辰野九紫/張赫宙/辻山春子/徳川夢声/中西伊之助/中村正常/長谷川春子/久生十蘭/水谷準/湊邦三/棟方志功/百田宗治/蘭郁二郎/鷺山第三郎 ほか

海軍の一部エリート将校のなかには軍事戦略に探偵小説作家の知識・知見を活かすことができるのではないかと考えている人々がいた。ひとたび航海に出しまえば長期間にわたって閉鎖的な空間のなかで単調な生活を送らなければならない海軍兵士たちにとって、「慰問袋」や娯楽によるストレスの解消は極めて重要な課題であり、探偵小説作家には娯楽に供する文章を書いてくれることが期待されていた。雑誌『くろがね』及びくろがね叢書は限られた会員にのみ頒布されていたため、内閣情報局による検閲を逃れることができた。厳しい言論統制と不当な偏見が災いし一

般の商業誌等に作品発表の機会を得ることができなくなっていた探偵小説作家たちは、海軍外郭団体・くろがね會に集結し、同会の会報『くろがね』に随筆等を發表することで戦時下にも「活字」と携わりながら過ごすことができた。毎月のように開催される講演会や意見交流の會合に参加することで情報を交換することもできた。戦後すぐに探偵作家協會が発足した経緯などを考えると、この時代に探偵小説作家たちが孤立することなく作家グループを形成し続けたことには大きな意味があった。

[本書収録《石川 巧「江戸川乱歩所蔵本 海軍外郭団体雑誌『くろがね』解題』より]

言論統制下 乱歩ら寄稿

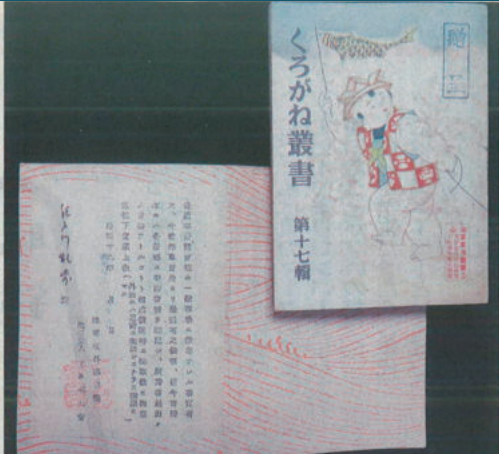
戦時下の言論統制で作品の発表の場を奪われた江戸川乱歩ら探偵小説作家たちが、海軍省の外郭団体の會報に隨筆を寄稿し、戦時中も執筆を続けていたことが、立教大の石川巧教授(日本近代文学)の調査で分かった。二十六日に東京都内で開かれる日本近代文学會春季大会で発表する。會報は当局の事前検閲の対象外だったとみられ、作家が一定の自由を得て執筆していたことがうかがえる貴重な資料だ。

海軍関連の会報に随筆

乱歩らが寄稿したのは、「海軍精神の昂揚と海防思想の普及をはかる」ため一九四一年に結成された海軍省の外郭団体「くろがね會」の會報『くろがね』。乱歩の蔵書や遺品を管理する立教大や、神奈川近代文学館が所蔵していたが、詳細な研究は行われてこなかった。筆を折ったとされている戦時中の乱歩や、別の小説分野に転じた探偵作家らの詳しい動向が分かり、石川教授は「戦時下の言論統制を多角的に捉えるためにも注目すべき資料だ」と話す。

事前検閲なし、自由な表現

雑誌に触れる論評や、「直立不動の姿勢で拳手の札をやられると、倅ながらちとこわくなる」と軍国少年の息子への違和感をつづる作家の原稿も掲載された。乱歩は海軍兵学校の訪問記「江田島記」を四二年十一月の會報に發表。卒業生と下級生の別れを「肩を抱かれた下級生の少年達の紅顔は見る／＼歪んで」と描写している。耽美でデカダン(退魔的)な作品が「反時局的」で「不健全」とみなされた乱歩だが、「くろがね」では自分の好みをストレートに表せたようだった。くろがね會は作家の菊池寛らが理事を務め、乱歩や小栗虫太郎、大下宇陀兒ら探偵小説作家も會員となつていた。読者は會員と一部の将校に限られていたようだが、一般の読者に會の刊行物を流出させないよう注意喚起する文書も残されていた。石川教授は「國民に言論統制を敷きながら、海軍中枢の一部に自由な表現が許される場が維持されていた」と指摘した。



くろがね會の刊行物で、一般読者に流出させないよう求めた江戸川乱歩宛ての文書。立教大江戸川乱歩記念大衆文化研究センター提供



江戸川乱歩 1894年三重県生ま

れ。1923年に雑誌「新青年」に「二銭銅貨」を発売してデビュー。同性愛を織り込んだ「孤島の鬼」や「怪人二十面相」などの「少年探偵団」シリーズで人気を博すが、39年に「芋虫」が発禁となり、事前検閲による書き直し命令も相次いだ末、執筆依頼も途絶えてしまう。戦後は探偵作家協会(現日本推理作家協会)を創設するなど、日本のミステリー界の発展に貢献した。65年に死去。